
曲目紹介

○ショパン

：ワルツ第4番「子猫のワルツ」

「ワルツ」は3拍子の舞曲でさまざまな作曲家による名曲もありますが、ショパンは本来の「踊る」から離れ、独創的な“ショパンのワルツ”をピアノのために作曲しました。

この曲は「ワルツ第4番 華麗なる円舞曲 へ長調 Op.34-3」として、1838年に作曲・出版されディクタール男爵夫人に献呈されています。一貫してコロコロと軽快で、華やかな調子が保たれ、第6番の「子犬のワルツ」に対し「子猫のワルツ」と呼ばれています。

：ノクターン嬰ハ短調 遺作

現在ノクターンは、生前に発表された18曲と死後に出版された3曲の計21曲が残されていて、それらの作曲時期は10代から晩年に至るまで続いています。ノクターンは特に決まった形式があるわけではありませんが、ショパンのノクターンはその多くが三部形式で書かれています。

この曲は遺作となっているものの作曲されたのは1830年で、ショパンがウィーンに出てきてまもないころの「若書き」作品です。出版されたのが死後75年になってからなので、「遺作」となっています。この曲は、三歳年上の姉ルドヴィカがショパンの「ピアノ協奏曲第2番」を弾くための指の練習のために作曲したともいわれています。この曲はアダージョでしたが、のちにブラームスがこれを筆写した折に「レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ」と変えています。

○ベッリーニ

ベッリーニは、1801年シチリア島・カタルーニアに生れ、34歳でパリ近郊で没しました。その生涯で11のオペラを作曲していますが、ロッシーニやドニゼッティとともに「ベルカント・オペラ」と称される19世紀前半のイタリアオペラを代表する作曲家です。ショパン、ベルリオーズ、ワーグナーらの賞賛と愛情の言葉を得ている事でも知られています。父親、祖父も音楽家であり、音楽を学ぶ前から作曲を始めたという神童でした。オペラは現代にも人気があり、「カプレーティとモンテッキ」「夢遊病の女」「ノルマ」「清教徒」等が今も世界中で上演されています。一方彼の歌曲は、そのほとんどが1825年以降にかかれており、現在知られている30曲は、そのほぼ半数がさまざまな組み合わせによる6つの曲集にまとめられています。

：マリンコニーア

歌曲集「6つのアリエッタ」の第1曲として、1829年にミラノで出版されました。ロマンティックな前奏に導かれ「やさしいニンファのマリンコニーア、私の命をあなたに捧げる。あなたの喜びを見くびる者は、本当の喜びに向いていない」と歌い、長調に変わり、「私の喜びはあの泉とあの山を越えることはない」と高揚した気分となり、そして静かに曲を閉じます。

：喜ばせてあげて

歌曲集「6つのアリエッタ」の第6曲になります。やや屈折した歌詞を持ちますが、休符が多く静かで美しい曲想を感じます。原曲は男女の愛情を歌ったものと思われませんが、現代

の社会状況に置き換えれば、両親であり、家族であり、友人であり、「どうぞ神様、あの人を喜ばせてあげてください」と祈らずにはおれない曲なのでしょう。

：追憶

オペラ「清教徒」のアリアのメロディーと錯覚するほどですが、この曲は独自の小品として隠れた人気を伴って親しまれています。イギリスの産業革命を経て、時代が激変し、音楽への嗜好も変わっていく中、古き良きベルカントの最後の火とも言える名曲です。歌詞によると、ある夜の出来事として始まり、男性が愛しい女性の死に遭遇するストーリー展開を、艶めかしい詩で印象的に歌い上げられます。ピアノ伴奏は、レガートかつピアノニッシモで弱音ペダルを使用するかのように、楚々として弾かれます。光景が心に浮かぶ曲です。

：銀色に輝く月

「メゾソプラノとピアノのための3つのアリエッタ」の第3曲であり、ベッリーニの歌曲の中でもっとも有名な作品となっています。美しい分散和音によるピアノ伴奏で、岸边や花を銀色に照らし出している優雅な月に向かって「どうか私の恋の気持ちを彼女に伝えてくれ」と歌います。さわやかな空気を感じられる、アンダンテ・カンタービレの作品です。

○リスト

：献呈

リストの時代は、家庭で音楽を楽しむ場合には演奏家によるアンサンブルか、ソロ以外には方法がありません。とりわけピアノは、一人で管弦楽曲でも演奏できるという便利さもあり、音楽好きのサロンでの主役的存在でした。リストは、招かれて自作や他の作曲家達のピアノ曲を演奏していますが、中でも人気だったのが、人々に親しまれていたオペラや管弦楽曲のさわりや人気歌曲などをピアノへ置き換えた演奏でした。リストはピアノへの編曲だけでも何と200曲近くを数えることができます。

シューマンの歌曲集『ミルテの花』は、原曲がリュッケルトによる無題の詩に作曲したもので、結婚式の前夜に、妻となるクララへ捧げた曲といわれています。同歌曲の第1曲が「献呈」なのです。リストはこの曲のメロディをピアノ独奏用に編曲し、華麗な装飾を施しています。

：愛の夢 第3番

「愛の夢」と名付けられた小品は3曲ありますが、そのなかでも第3番は「ラ・カンパネラ」「コンソレーション」などとともに、もっともポピュラーな小品として親しまれています。この3曲は、元々はウーラントとフライリヒャートの詩に付曲した歌曲として作曲されたものをピアノ用に編曲され、リストの抒情的な一面がよく現れた小品となっています。副題に付けられた《三つの夜想曲》が示すように、ショパンのノクターンを意識したかのような印象を受ける作品です。

：ラ・カンパネラ

パガニーニのヴァイオリン協奏曲第2番第3楽章のロンド『ラ・カンパネラ』の主題を編曲して書かれました。名前の **Campanella** は、イタリア語で「鐘」という意味です。リストが「ラ・カンパネラ」を扱った作品は4曲存在しますが、最終稿の『パガニーニによる大練習曲』第3番は、数多くあるリストの作品の中でも最も有名なものの一つとなっています。リストは、曲全体の構成を洗練し、ピアノの高音による鐘の音色を全面に押し出しました。全

体として、器用さ、大きい跳躍における正確さ、弱い指の機敏さを鍛える練習曲として使うことができます。最大で15度の跳躍があり、この跳躍を16分音符で演奏した後に、演奏者に手を移動する時間を与える休止がないまま2オクターブ上で同じ音符が演奏されるなど、他にも薬指と小指のトリルなどの難しい技巧を含んでいます。

・ ・ ・ 休憩 ・ ・ ・

○シューマン：歌曲集「詩人の恋」

ある若者が恋をして、失恋したという筋書きは一応もっているにせよ、大まかで抽象的で、表面的な起承転結よりは内面での心理の推移のほうに重点がおかれています。ピアノ作曲家らしく、ピアノ伴奏も声楽に増して、表現力豊かな曲集です。第1曲から第6曲までは愛の喜びを、第7曲から第14曲までは失恋の悲しみを、最後の2曲はその苦しみを振り返って歌っているものと考えることができます。

次の各曲からなります。

第1曲 美しい五月にすべての花が咲くとき、ぼくはあの人に心を打ち明けた。

第2曲 僕の涙から花が咲き出て、ため息はナイチンゲールの歌となる。君が愛してくれるならこの花をみんなあげよう。

第3曲 ばらや百合や鳩が以前は好きだったが、今は君しか好きでない。

第4曲 きみの瞳を見つめると悩みは消えてしまう。きみの胸にもたれると天国に行ったようだ。

第5曲 ぼくの心を百合のうてなに浸そう。そこから愛する人の歌を響かせよう。

第6曲 聖なるラインの流れにケルンの大聖堂が映る。聖母マリアの画像はあの人にそっくりだ。

第7曲 ぼくは恨みはしない、心が裂けても。きみが放蕩はどんなにみじめか知っている。

第8曲 花がわかってくれるなら、ぼくがどんなに傷ついているかを。

第9曲 あれはフルートとヴァイオリンの響きだ。婚礼の踊りだ。その中で可愛らしい天使たちが泣いている。

第10曲 かつて愛する人の歌ってくれた歌が聞こえると、激しい悲しみにひしがれる。

第11曲 ある若者が娘に恋をした。その娘は別の男が好きになった。その男はさらに別の女と結婚したため、やけになったもとの娘は行き当たりばったり出会った男と一緒にになった。よくある話だ。

第12曲 まばゆく明るい夏の朝に、庭を歩むと、花々は私たちの妹を悪く思わないで、とささやきかける。

第13曲 ぼくは夢の中で泣きぬれた、夢の中できみはぼくにやさしかった。夢から醒めるとぼくはなおはげしく泣いた。

第14曲 夜ごとにぼくはきみを夢に見る、きみはやさしいが、夢から醒めるとそれは消えてしまう。

第15曲 むかしの童話のなかから歌声がひびく、その魔法の美しい国も陽がでると消えてしまう。

第16曲 昔のよこしまな歌草を大きな柩に入れ、それと一緒に愛の苦しみを海に葬ってしまおう。